



# 学校だより

令和 3年 1月29日  
練馬区立田柄第二小学校  
校長 谷田 弘子

HP <http://www.tagara2-e.nerima-ky.ed.jp> e-mail [info@tagara2-e.nerima-ky.ed.jp](mailto:info@tagara2-e.nerima-ky.ed.jp)

教育目標: 元気な子ども・考える子ども・思いやる子ども

No.518

## 「鬼」から学ぶ「優しさ」

副校長 小安 裕子

つい先日、年始を迎えたばかりと感じていましたが、もう2月に入りました。今年度も残すところ2か月。春もそこまでという状況と時間の流れの速さに驚きます。2月と言えば「節分」です。「節分」は「鬼を追い払って新年を迎える、立春の前日の行事」と考えられています。私たちにとって2月3日のイメージが強い「節分」ですが、今年の「節分」は2月2日で、明治20年以来124年ぶりのことだそうです。

私は学級担任をもっていった時に絵本の読み聞かせをすることが大好きでした。それぞれの季節に合わせた絵本や子供たちが興味をもっている話題の絵本を主に読み聞かせていたのですが、「節分」の季節には様々な「鬼」に関する絵本を読み聞かせることが多くありました。皆さんは「鬼」と聞くとどのようなイメージをもたれるのでしょうか。「怖い」「強い」「悪」…というイメージが強いように思います。昨年映画化され、子供たちだけでなく大人の人気も今もなお高い

「鬼滅の刃」にも鬼が登場しますし、昨年度末から実写映画化されていた「約束のネバーランド」にも鬼は登場します。どちらの作品においても鬼は人間にとっての「悪」であり、手法は違いますが、どちらにも人間と鬼との戦いが描かれています。有名なお伽話にも鬼が登場する作品が多くあります。「桃太郎」は誰もが知っている有名なお伽話ですが、犬・猿・きじを従えて鬼ヶ島へ鬼を退治しに行く話です。「一寸法師」もとても体の小さな男の子が武士になるために京へ出て、鬼と戦う話です。このように鬼は「悪」として描かれることが多く、鬼を退治することに面白さや爽快感を感じる人がたくさんあります。けれど、私が読み聞かせをしている中で、必ず「節分」の時期に子供たちに読み聞かせをしていたお話が1つあります。それは「島ひきおに」というお話です。

このお話は次のようなものです。

昔、海の真ん中、ぽつんとある島に鬼が一人で住んでいました。とても寂しがりの鬼は沖を通る船を見ては「おおい。こっちゃん来て遊んでいけ。」と声を掛けます。しかし、人間は鬼が怖くて仕方ありません。ある嵐の夜、沖を通りかかった漁船が遠くに光る鬼の目を家の明かりと見間違えて、助けを求めて鬼の島へやってきました。鬼は嬉しくて、漁師たちの前へ現れました。けれど漁師は驚いて命乞いをします。人間と一緒に暮らすにはどうしたら良いかを尋ねる鬼に人間は「島を引っ張ってくれば一緒に暮らせる」と伝えます。その言葉を信じて、懸命に島をひく鬼。鬼は人間と一緒に暮らすことだけを願い、島をどこまでも引いていきます。

このお話はとても寂しい話です。この本に登場する鬼はかつての「鬼」のイメージと大きく違います。子供たちは読み聞かせが終わると「この鬼はとても優しくかったね。」「鬼がかわいそうだった。」「人間は鬼と遊んであげれば良かったのに。」と話すことが多く、読み聞かせが終わった時に子供たちにとっての「鬼」はそれまでの「怖い」ものではなくなります。子供たちは「鬼」は必ずしも「怖い」ものではないことを読み聞かせを通して理解します。

私たちはもののイメージで様々なことを判断していないでしょうか。「鬼」＝「怖い」のように、固定概念で決めつけていないでしょうか。ものの本質を見抜く、物事の奥深くを見極めて判断することはとても難しいと感じます。今、コロナ禍で当たり前が当たり前でなくなってきたおり、価値観も変革の過渡期を迎えています。今こそ私自身を含めた一人一人が固定概念をなくし、物事の本質を見極めていけるよう努めていくことが必要になるのだろうと「島ひきおに」を読んで考えています。